

アイルランドにおける初等教育の現状 —小学校で4・5歳児を対象に行われる幼児教育を中心に—

表 真 美
(教育学科)

1. 研究の目的

(1) アイルランドの教育制度

アイルランドの教育制度は教育・技能省によって定められ、初等、中等教育を無料で受けることができる。義務教育は、初等教育から中等教育の前期にわたる6歳～15/16歳までの9年間となっており、学校予算の大部分は国からの補助金で賄われている。その後国内統一試験(Junior Certificate)を受け、中等教育の後期が終了する17/18歳まで教育を受ける者が多数を占めている。生徒は中等教育が終わる時点で、公立・私立にかかわらず国内統一試験(Leaving Certificate)を受け、高等教育への資格を取得する。アイルランドではこの試験の成績により、大学進学先や就職先の決定に大きな影響が出るため、同試験が重視されている。

中等教育は、普通中等教育学校、職業学校、コンプリヘンシブ・スクール(総合中等学校)、コミュニティ・スクールで行われている。普通中等教育学校は民間経営であり、半数以上を修道会が運営、残りは学校法人等が経営しているが、ほとんどの学校の教育費は無料である。職業学校は職業教育委員会によって運営されている。

後期中等教育を修了した者の約46%は大学等の高等教育機関に進学する。高等教育には総合大学、科学技術カレッジ、教員養成カレッジがあり、ほとんどが国の予算で賄われている。私立のカレッジもあり、主にビジネス関連コースを提供している^{1)~4)}。

(2) アイルランド初等教育の概要と宗教教育

アイルランドの小学校は、National School

(国民学校)と呼ばれている。6年間の義務教育に加え、2年間の幼児学級が併設されており、小学校は8年制である。小学校にはJunior Infantsと呼ばれる4歳クラス、Senior Infantsと呼ばれる5歳クラスが設置され、多くの子どもは6歳以前の幼児学級から就学している。4歳児は約4割、5歳児のほとんどすべてが小学校に在籍している。前述のように、修道会が運営し、民間経営と言えるが、学校予算の大部分は、国からの補助金で賄われている⁵⁾。

1学期は9月～12月、2学期1月～4月、3学期4月～6月である。我が国のような学区制はなく、子どもが通う小学校は、保護者が選択して決定する。保護者は、学校がホームページなどに公表している教育目標、自己評価結果などから、子どもが通う小学校を検討する。試験などは行われず、登録制で、入学の1年前から登録を受け付けている学校が多い。徒歩圏内であれば、保護者が送迎し、また、スクールバスを設けている学校もある。

前述のように、アイルランドでは、今なおキリスト教会が学校運営に重要な役割を担っている。アイルランドの小学校では、宗教教育に関して、国が教育スタンダードを設けず、教育内容は各宗派に委ねられている。

カトリック系小学校では、週に2.5時間以上の宗教の時間があり、朝、昼食の前後、帰りの時間にお祈りが行われている。カトリック系小学校の宗教の時間には、アイルランド聖公会が示したカリキュラムに準拠した統一教材“Grow in Love”シリーズが使われている。同シリーズは教師用指導書、児童用ワークブック、CD、

ポスターセット、オンラインリソースがセットになり、各々就学前教育から小学校4年生までの6種が発行されている。児童用ワークブックはおよそ週1回見開き2ページが、左ページは学校で、右ページは宿題として学習されている。プロテスタント系小学校でも教会が作成した統一カリキュラムが使われ、宗教色のない小学校では「倫理」が教えられている⁶⁾。

(3) 先行研究と本研究の目的

アイルランドの教育に関する我が国の研究蓄積は極めて少ない。

これまで、アイルランドの学校教育に関する先行研究は、和田による一連の研究が見られるが、主に中等教育に歴史についての論考である^{7)~11)}。岩下はキリスト教会が強く関与する公教育の成立について考究した¹²⁾。学校教育の現状については、近年、中等教育における家庭科教育、宗教教育について、明らかにされた^{13)~16)}。

藤井は、諸外国の幼児教育の義務化について研究しており¹⁷⁾¹⁸⁾、イギリスを構成する諸国は小学校就学年齢が早いことを示した(表1)。同じアイルランド島に位置する、英国の北アイルランドにおいて、藤井は「小学校の入学年齢を下げることにより、わが国の幼児教育段階に相当する子どもたちに義務教育を保障している

こと」について、「4、5歳児にふさわしい遊び中心の教育の実現が、小学校教育の厚い伝統の枠の中で阻まれているようにも見える」と論じている¹⁹⁾。藤井が示した表には、アイルランドの小学校の就学年齢は6歳とされているが、義務教育ではないものの、上述のように、アイルランドの小学校でも、4・5歳児クラスが設置されており、4歳児から就学する子どもが多いことが明らかである。アイルランド共和国が1947年に英連邦を離脱するまでは、両国は同じ国であり、教育に関しても源流を一にしていることが幼児教育の類似の要因であろう。

上記の藤井による北アイルランドについての先行研究では、主に制度について明らかにしており、4・5歳児の教育の実際を明らかにするものではない。人口が約470万人であり学校数は少なく、学校運営への教会の役割が大きいなど、我が国とアイルランドの教育との隔たりは顕著である。しかし、4歳から始まる小学校教育の現場の状況について明らかにすることは、今後の我が国の初等教育の在り方を考えるにあたり、何らかの示唆となるだろう。そこで、アイルランドの初等教育、特に、4、5歳児対象の幼児学級で行われている小学校教育について明らかにすることが、本研究の目的である。

表1 EU諸国の小学校就学開始年齢

年齢	国
4歳	北アイルランド
5歳	キプロス、イングランド、マルタ、スコットランド、ウェールズ
6歳	オーストリア、ベルギー、クロアチア、チェコ、デンマーク、フランス、ドイツ、ギリシャ、ハンガリー、アイスランド、アイルランド、イタリア、リヒテンシュタイン、ルクセンブルク、オランダ、ノルウェー、ポルトガル、ルーマニア、スロバキア、スロベニア、スペイン、スイス、トルコ
7歳	ブルガリア、エストニア、フィンランド、ラトビア、リトアニア、ポーランド、セルビア、スウェーデン

(出典：Northern Ireland Assembly, Research and Library Service 2010: 10) 藤井 (2014) より引用

2. 研究の方法

本報告において用いた研究資料は、①「全国カリキュラム・評価審議会」による各教科の小学校カリキュラム、②小学校への訪問による、教師への聞き取り調査、および授業参観である。

(1) 各教科の小学校カリキュラム

各教科の小学校カリキュラムは、全国カリキュラム・評価審議会(NCCA: National Council for Curriculum and Assessment)ホームページより入手した²⁰⁾。

(2) 小学校教師への聞き取り調査、授業参観

小学校教師への聞き取り調査、授業参観は、2017年2月から3月にかけて、アイルランド北西部Sligoに位置するU小学校で行った。U小学校は、児童数387名、教員22名(2017年3月現在)、国鉄駅やSligo市街にも近い住宅街に

位置し、アイルランドにおいて典型的なカトリック系小学校である。

2017年2月16日に、U小学校のJunior Infantsクラス担任であるS氏を訪ね、学校の概要を調査するとともに、授業参観の依頼を行った。2月22日に学校を訪問し、宗教、昼食の時間の授業参観、放課後にS氏への聞き取り調査を行った。そして、3月27日午前に統合学習の授業参観を行った。S氏は宗教教育を専門としており、現在、勤務を続けながら、大学で宗教教育を学んでいる。

なお、インタビュー調査の内容は、小学校教育に関するもので、調査対象者の個人的な情報は含まれていない。S氏には調査結果の公表についての許可を要請し、文書による承諾を得た。

3. 研究結果

(1) アイルランド小学校の教育目標

アイルランド初等教育の目標、およびアイルランドカリキュラム・評価委員以下が示す小学校カリキュラムについて、アイルランド教育・技能省は以下のように述べている。

「初等教育の一般的な目的は以下のとおりである。子どもが完全な生活を送ることを可能にし、ユニークな個人としての自身の可能性を実現する。子どもが他人と一緒に生活し、協力して社会的存在として成長し、社会に貢献できるようにする。子どもに学習を継続する準備をする。小学校のカリキュラムは幅広い学習経験を提供することを目的としており、個々の子どものさまざまなニーズに対応するために、多様な教授法や学習方法を奨励している。」²¹⁾

(2) 小学校における必修教科と小学校カリキュラム

アイルランドの小学校における幼児学級から6年生までの必修教科は、宗教教育を入れて12教科である(表2)。宗教教育以外の11教科において、全国カリキュラム・評価委員会が詳細なカリキュラム、および教師用ガイド(Teacher Guideline)を設けている。前述のように、宗教教育には国が示すカリキュラムはなく、教育は各宗派に委ねられている。我が国の学習指導

表2 小学校における必修教科

NO.	領域	教科
1	言語	アイルランド(ゲール)語
2		英語
3	数学	数学
4	体育	体育
5	芸術	美術
6		音楽
7		演劇(ドラマ)
8	社会環境・科学教育	歴史
9		地理
10		科学
11	社会・個人・健康教育	社会・個人・健康教育
12	宗教教育	宗教教育

NCCA ホームページより筆者作成

要領が示すような各教科の年間単位時間数に関しては、国が一括して明確に示すことはされておらず、各々の学校が決定する。各学校は自校の教育の計画について、ホームページなどを利用して公表している。

教科カリキュラムは11教科すべて、「はじめに」「幼児クラス」「1・2年生」「3・4年生」「5・6年生」「評価」「付録」の7章に分かれている。「はじめに」には、概ね教科の概要、ねらい、具体的な目標が示されている。全体的には同じ書式になっているが、各カリキュラムの内容の書式やページ数は異なる。

後述のように、訪問した小学校の時間割で授業時間数が多かった「英語」「数学」の2教科を取り上げ、各々のカリキュラムの概要を紹介する。

1) 小学校英語カリキュラム

小学校英語カリキュラムは、全74ページである。すべての発達段階において、「言語受容性」「言語を使うこと的能力と自信」「言語を通した認知能力の発達」「言語を通した感情と想像力の発達」の4要素から構成されている。各要素は、「話す」「読む」「書く」ことについて、目

標が定められている（表3）。表3に示した「概観」は2要素の「読む」ことのわずかな違いはあるがほとんどはどの発達段階でも同様である。幼児段階における「言語受容性」の学習内容について表4に示した。「話す」「読む」「書く」ことについて、具体的に示されている。初歩的な段階とはいえ、幼児に対しても言語についての認知的学習が指示されている。

2) 小学校数学カリキュラム

小学校数学カリキュラムは、全127ページである。すべての発達段階において、子どもに付けたい技能は、「応用と問題解決」「交流する、表現する」「統合する、繋ぐ」「推論する」「実行する」「理解する、想起する」の6領域に分けて示されている。また、具体的内容は、「数」「代数」「図形と空間」「測定」「データ」の5領域、それに加え、幼児段階では、「初歩数学的活動」が示され、6領域となっている（表5）。幼児段階での子どもに付けたい技能は、表に示すとおりである（表6）。「数」に始まる5領域の内容は、Junior Infant（4歳児）、Senior Infant（5歳児）に分けて、極めて具体的、詳細に示されている。例えば、表5にみられる

「数」における「数える」学習では、Junior Infantの内容は「1から10までの数を数える」、Senior Infantは、「0から20までの数を数える」とあり、さらに具体的な説明が加えられている。

アイルランドの小学校では、幼児（4・5歳児）にのみに特別なカリキュラムが用意されるのではなく、幼児学級でも、義務教育である小学校1年生から6年生までと同じ教科での初歩的教育が行われていることが明らかになった。

(3) U 小学校幼児学級の時間割

訪問したU小学校のJunior Infant（4歳児）クラスの時間割は、月曜から金曜まで、朝8：50の始業から13：30までで計画されていた（表7）。登校後5分のお祈り、30分の統合学習、その後2単位時間の授業後、15分の休み時間を挟んで、3単位時間、昼食後1単位時間の授業が組まれていた。宗教は4日間30分間、木曜には45分の授業時間が充てられていた。アイルランド語は週3回、英語と数学は週5回学習されていた。体育は週2回、美術は同じ日に2単位時間続きで、音楽と演劇は週1回であった。社会環境・科学教育は3教科を区別せずに週2回、社会・個人・健康科学は週1回であった。

表3 小学校英語カリキュラムの概観 (Infant Classes)

要素	区分	内容
言語受容性	話す	話す言語への受容性を高める
	読む	言語と活字の概念を開発する
	書く	書く衝動を創造して育む
言語を使うことの能力と自信	話す	話す言語を使うことの能力と自信を発達させる
	読む	読む技能と戦略を開発する
	書く	自分で書く能力、自信、才能を発達させる
言語を通じた認知能力の発達	話す	話す言語を通じて認知能力を発達させる
	読む	考えることに関心、態度、能力を発達させる
	書く	書くことを通して思考を明確にする
言語を通じた感情と想像力の発達	話す	口頭での言語生活を通して感情的かつ想像力豊かな発達を促す
	読む	文章に反応する
	書く	書くことによって感情的で想像力豊かな人生を展開する

NCCA “Primary School Curriculum English” より筆者作成

表4 小学校英語カリキュラム Infant Classes 「言語受容性」の内容

話す	簡単な指示を経験し、認識し、観察する 見る／聴く／注視する
	話や説明を聞いてそれに反応する
	教師によりモデル化された単語、フレーズ、文章を聞いて、繰り返して述べる
	様々な感情を表現する声の調子を利用して説明する
	相手への注意を守り続け、適切な言語的・非言語的行動を行うことを学ぶ アイコンタクトをとる／適切な頭の動き、ジェスチャー、表情を利用する／可聴性と明瞭性を確保する
	様々な感情を伝えるジェスチャー、動きや態度をまねし、行う
読む	物語、童謡、詩、歌を聴く
	読んだり話した物語に基づく一連の聴く活動を展開することを通して積極的リスナーになる 連続した物語を語り、繰り返す／単純な物語や出来事を思い出し、述べる／質問をする／ロールプレイングをする
	言語を使って遊んで音の認識を深める 言語ゲーム／音素と形態素／健全な関係／簡単な詩／旋律／歌うゲーム／歌や詩の活動／多様なリズム／子供の名前のような特定のニーズに適した言葉を書いてみる
	リズムと韻の感覚を展開する 歌／童謡／ジングル／音節リズムの呼びかけとダンス
	教室での活字をはじめとする幅広い環境の活字に親しむ
	本の基本的な用語と慣習について学ぶ 著者とタイトル／左から右の方向／上から下への向き／前から後への向き
	教師と協同する中で、自分や他の子どもたちが作成した文章を読む
	アルファベットの文字を認識して名前を呼ぶことを学ぶ
	文字と音の関係に対する意識を発展させる
書く	印刷物の豊かな環境を体験して楽しむ
	時々筆者として正確に支援する教師に助けをもらう
	頻繁に書いたり描く 書く／文字と記号、見出し、言葉と文章を書いてみる
	さまざまな聞き手のために書く 自分自身／教師／他の子ども／家族／訪問者
	展示された個人的な執筆物を見る ワークシート／芸鬱活動の一部として／執筆物の書棚・ライティングコーナー／クラスのコレクション
	個人的な執筆物を大きな声で読み、それを聴く

NCCA “Primary School Curriculum English” より筆者作成

統合学習は、表7の下部にあるような内容の、教科横断的に遊びながら学習するプログラムであった。

(4) 統合学習の授業参観(表8)

訪問当日は月曜日であり、授業参観のために、統合学習と体育の授業が入れ替えられた。統合学習は、複数の教科を組み合わせた教科横断的学習であり、表7の下部にある5つの内容が計画され、学習されていた。当日は、5つの内容

のうち、「読み書き能力／計算能力」の時間であった。

体育の授業から子どもたちが教室に戻ると、担任教師は、習熟度などから判断し、24名のクラスの子どもたちを、5つのグループに分けた。指導者は、担任教師と学習支援教師3名である。5人と4人のグループが机の周りに座ると、それぞれのグループが異なる活動を始めた。各活動は、計算能力、読み書き能力、両者を組み合

表5 小学校数学カリキュラムの概観 (Infant Classes)

技能の発達		要素	区分	要素	区分
技能	応用と問題解決	初歩数学的活動	分類する	代数	広範パターン
	交流する, 表現する		一致させる	図形と空間	空間認識
	統合する, 繋ぐ		比較する		3次元の形
	推論する		配列する		2次元の形
	実行する	数	数える	測定	長さ
	理解する, 想起する		比較と配列		重さ
数の分析			容量		
合わせる			時間		
割る			お金		
	数え方	データ	データの認識と解釈		

NCCA “Primary School Curriculum Mathematics” より筆者作成

表6 小学校数学カリキュラム Infant Classes の「子どもに付けたい技能」

応用・問題解決	数学の課題のための適切な資料と過程を選ぶ
	課題を終える, 問題を解くための適切な戦略を選び, 応用する
	問題の結果を認識する
交流・表現	数学的活動を話し合い, 説明する
	数学的活動の結果を完全に, 図や絵, 数を用いて記録する
	提示された問題について具体的, 絵をかいて, 口頭で話し合う
統合・繋ぐ	公式な数学理念により得られた数学理念を非公式につなぐ
	環境の中に数学を認識する
	口頭で, 具体的に, 図に表して示された数と, 象徴的な形で示された数の関係を認識する
	他の領域のカリキュラムを含んだ数学活動を実施する
推論	論理的な範疇に対象を分離する
	感覚的な類型を認識し, 創造する
	活動の過程や結果を説明する
実行	数学の課題を解く精神的戦略や手順を編み出し, 利用する
	数学の問題, 手順を行うために適切な方法を用いる
理解・想起	用語を理解し想起する

NCCA “Primary School Curriculum Mathematics” より筆者作成

表7 Junior Infant クラスの時間割と統合学習の内容

時刻	月	火	水	木	金
8:50	お祈り	お祈り	お祈り	お祈り	お祈り
8:55	統合学習（プレイセッション）	統合学習（プレイセッション）	統合学習（プレイセッション）	統合学習（プレイセッション）	統合学習（プレイセッション）
9:25	体育	英語	英語	数学	体育
10:00	アイルランド語	英語（TT）	アイルランド語	英語（TT）	数学
10:30	休み時間	休み時間	休み時間	休み時間	休み時間
10:45	英語 数学	数学	数学	宗教	クラス活動 社会環境・科学教育
11:30	英語	アイルランド語	英語／社会環境・科学教育	美術	アイルランド語
12:00	宗教	宗教	宗教	美術	宗教
12:30	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
1:00	音楽	社会・個人・健康教育	社会環境・科学教育	アイルランド語	演劇
1:30	下校準備	下校準備	下校準備	下校準備	下校準備

統合遊びの内容

各々の週で例えば下記のような5つの場面

- 1) テーマにもとづく社会的／劇的領域（英語，演劇，社会・個人・健康教育）
- 2) スモールワールド／空想活動／製作
- 3) 言語とコミュニケーション
- 4) 読み書き能力／計算能力
- 5) 繊細に／大まかに 動く技能

(U 小学校 S 氏より入手した資料より筆者作成)

表8 授業参観した統合学習の流れ

時間	子どもの活動
9:30-9:35	当日は月曜日の時間割の体育と統合学修を入れ替え，24人を5グループに分ける
9:35-10:00	担任教師と3名の学習支援教師が担当し，5つのグループにより異なる活動 計算能力の学習： ①引き算の学習，葉っぱの上の虫をイグアナが食べ，残りを数える（写真1） 読み書き能力の学習： ②アルファベットを書く練習（写真2） ③消せるシートにペンで単語を書く練習（写真3） ④さいころを振り，出た数のワークシートの単語に色を塗る（写真4） ⑤正しい言葉選び（写真5） → アルファベットかるた（写真6）
10:00-10:05	全員でアルファベットの読み方を学習（写真7）

わせた学習であった。

具体的には、以下の通りであった。①教材の葉っぱの上に数を数えながらてんとう虫を置き、学習支援教師の一人が「イグアナが食べたら何匹になるでしょう??」と声掛け、てんとう虫を除き、残りが何匹になったか数える引き算の学習（写真1）、②各自ノートにアルファベットを書く練習をする（写真2）、③ラミネートした横長の白いシートに、フェルトペンで単語をくり返し書く練習をする（写真3）、④さいころを振り、出た数によって指示された文字、単語を見つけて、その部分に色鉛筆で色を塗る（写真4）、⑤絵を見て正しい単語にしるしをつける（写真5）、同じグループはその後、学習支援教師とともにアルファベットかるたゲームを行った（写真6）。25分間、グループごとの活動が続けられた後、担任教師がモニターを使って、アルファベットの学習を5分間行った（写真7）。

子どもたちは、4名の教師の指導の下、私語



写真1 数、引き算の学習



写真2 文字を書く学習



写真3 単語を書く学習



写真4 数と単語・文字を組み合わせた学習



写真5 正しい単語を選ぶ学習

や、教室内を立ち回ることもなく、整然と学習に集中していた。遊び的活動における学習ではあるものの、様々な教材を用いて、言語教育、数学教育が幼児（4歳児）対象に行われていた。

また、NCCAが示す小学校英語カリキュラムの幼児段階学習要素の一つ「言語受容性」の「読む」の内容に「教室での活字をはじめとする幅広い環境の活字に親しむ」（表4）とある



写真6 アルファベットかるたゲーム



写真7 全員でモニターを見ながらのアルファベットの学習

ように、教室の壁一面に、各教科に関する掲示物が貼られていた。

4. まとめと今後の課題

我が国の幼児教育への示唆を得るために、アイルランドの小学校における幼児教育について、国が示す小学校カリキュラム、および訪問調査により明らかにした。

アイルランドでは、小学校は4歳から12歳の8年制であり、義務教育ではないものの、4歳児の約4割、5歳児のほとんどが小学校に通学していた。小学校の必修教科は、宗教教育を含めた12教科であり、幼児学級から6年生まで共通である。宗教以外のカリキュラムについて、国の機関である全国カリキュラム・評価審議会が、発達段階に応じた詳細な教育スタンダードを示していた。それにより、小学校現場では、幼児クラスにおいても、毎日の時間割に従って、教科の認知的学習が行われていた。

小学校学習指導要領と、幼稚園教育要領あるいは保育所保育指針や認定こども園教育・保育要領が区別されて提示されている我が国の制度とは全く異なる状況であることが明らかとなった。北アイルランドにおける4歳からの義務教育について「遊び中心の教育の実現が拒まれている」との見方があった²¹⁾。本研究では、1校の短い授業時間の事例についての調査に限られていたため、そこまでの考察は難しい。我が国の幼稚園、認定こども園、保育所では、幼児の発達に応じた遊び中心のカリキュラムが用意されている。とは言え、我が国の幼児教育にとり大きな役割を担っている私立の幼稚園、認定こども園や保育園では、「知育」を特徴としている場合が少なくない。また、就学前に読み書き・計算の教室に通う子どもの比率も決して低くないことも事実である²²⁾。この様な、早期からの、認知的能力発達を目指した教育の効果は、十分に検証されたとは言い難い。我が国でも今後、幼小連携を見据えたうえで、幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針を一本化する必要が生じるだろう。その時に、アイルランドの様に、4歳から小学校教育を行っている他国の事例も、検討する必要があるだろう。

今後は、アイルランドにおけるさらに詳細な小学校教育の状況とその効果について、研究を進めたい。

文 献

- 1) 外務省ホームページ「諸外国・地域の学校情報」
http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05europe/infoC50200.html
(2017年10月25日閲覧)
- 2) ヨーロッパ日本語教師会・国際交流基金2006『日本語教育国別事情調査』149-153
- 3) アイルランド教育・技能省ホームページ
<https://www.education.ie/en/The-Education-System/> (2017年10月25日閲覧)
- 4) アイルランド教育・技能省ホームページ
<https://www.education.ie/en/The-Education-System/Post-Primary/>
(2017年10月25日閲覧)
- 5) 前掲ホームページ1)
- 6) 表真美 2018「アイルランド共和国の小学校

- における宗教教育—カトリック新カリキュラムを中心に—」京都女子大学宗教文化研究所紀要31, 89-104
- 7) 和田英武 2003「アイルランドの近世以後における中等教育の発展」九州教育学会研究紀要31, 113-120
- 8) 和田英武 2004「アイルランドの中等教育におけるカリキュラムの展開と改革—1960年代～80年代初期を中心に」九州教育学会研究紀要32, 77-84
- 9) 和田英武 2005「アイルランドの中等教育のカリキュラムと公的試験」九州教育学会研究紀要33, 87-94
- 10) 和田英武 2006「アイルランドの初等・中等教育における教育行政の変遷—学校経営との関連において」九州教育学会研究紀要34, 225-232
- 11) 和田英武 2014「トーマス・ワイズ (T・Wyse) のアイルランドにおける国民教育制度論：イギリス政府及び議会の考えとの比較を通して」九州教育学会研究紀要42, 29-36
- 12) 岩下誠 2012「アイルランド公教育の成立をめぐって—研究動向と課題—」教育学研究79, 286-296
- 13) 表真美 2016「アイルランド中等教育における家庭科教育」日本家政学会誌67, 627-637
- 14) 表真美 2017「アイルランドにおける家庭科教師の意識と授業資料」日本家政学会誌68, 285-296
- 15) 表真美 2017「アイルランドにおける家庭科教員養成の実態」68, 430-438
- 16) 表真美 2017「アイルランド中等教育における宗教教育」京都女子大学発達教育学部紀要13, 1-10
- 17) 藤井穂高 2013「幼児教育義務化論」日本教育制度学会編『現代教育制度改革への提言』上, 東信堂
- 18) 藤井穂高 2016「スイスにおける幼児教育義務化の経緯と論理：フリブール州を事例として」筑波大学教育系論集40(2), 1-15
- 19) 藤井穂高 2014「北アイルランドにおける4歳児就学義務制度の課題」筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎学教育論集10, 1-24
- 20) アイルランド全国カリキュラム・評価審議会(NCCA) ホームページ
http://www.ncca.ie/en/Curriculum_and_Assessment/Early_Childhood_and_Primary_Education/Primary-Education/
 (2017年10月25日閲覧)
- 21) 前掲論文19)
- 22) 表真美 2013「第1章現代の子育て・家庭教育」『家庭と教育 子育て・家庭教育の現在・過去・未来』ナカニシヤ出版, 3-14